

き

っかけの項にあーとが記しているように、彼女を突き動かしたのは、学校に行けず絵本にも出合うことのない世界の子どもたちの存在だが、同時に、チャリティーという貢献方法があつて、自分にもできるんじゃないかと気づいたことが大きかったと思う。おそらく住職から話を聞いていたときにはすでに考えていたことだろう。落語会がチャリティーになるのだったら、自分は加えてピアノも歌もあるから、きつとできるんじゃないかと、と。さてプログラムに並ぶもう一つ。

落語 1時間

落語に出てくる一人一人になりきって、みんなを思いつきり笑わせたいです。松江にまつわる落語もします。松江のれきしにきょうみをもってもらうきっかけになりたいです。小泉八雲の怪談の語りもします。八雲の伝えたかったことや、怖いだけじゃない世界を表現します。

時 二〇二五年十月一三日(月・祝日)

場所 県民会館中ホール

ゲスト プラバ少年少女合唱団 会に花をそえてもらいます。

きふ先 公益社団法人シャンティ国際ボランティア

協会

えんじよをおねがいがしたいこと チャリティーコンサート実行委員会への参加(当日の受付、ドア係など、チラシのせつちやこうほう活動)

以上があーとの作った企画書の全文である。小学校二年生の子がこんなこと構想して書けるのかと思われる向きもあるかもしれないが、家族の協力は当然あるにしても、彼女と一年半落語を通してお付き合いした身としては、少しも不思議に思えない。

あーとは、ピアノも歌も各コンクールで全国も含めてトップか上位入賞の常連で、誰もがその才を認めるのだが、その子がなぜ落語にも意欲を見せるのか、「きかく書」を見ながらぼくにはピンときたことがある。ピアノにせよ歌にせよ、美しさを追求するもので、評価も賞賛も作り出した美しさに対して与えられるものだ。そこへいくと落語はかなり異質。労苦への対価は拍手や賞賛の言葉もだけど、それより価値あるのはお客さんの笑い声だ。あーとにとつては、どれも表現なのだが、笑わせることを目的にしたものは落語だけ。それに驚いたし、魅力を感じたのだと思う。

お客さんを笑わせることにあーとは貪欲だ。尾籠な話でぼくが躊躇していると「なんでやつちやいけないうんですか」と言ってくるほどに。

読者の皆さまのえんじよをおねがいがしたい。

老い老いに
木幡智恵美

28

夕

焼け通信は奥出雲を拠点として六年目に突入した。編集長による「加害者としての私の戦争体験-日本は中国で何をしてきたか」の講演録、Y氏の「放浪の記」、「看護・今、むかし」が連載される中、もう一つ連載が加わった。子ども頃の頃から悩みを抱えた上、成人してからは心身ともに大変な重荷を負って過ごされた体験を吐き出した「私の三十代」だ。原稿四十三枚を六日で書かれたというOさん。縁があつて編集長と知り合いになり、夕焼け通信への投稿を勧められたというOさん。縁が違った作家の訃報に接した際、「書く」必然性が湧き起こったのだそうだ。連載を終えて書かれた文章の抜粋を次にあげる。

書き終えたとき、この七年間の苦しみがむくわれたと思えました。体験にことばを与えることで、一時的にせよ別次元に飛翔できる貴重な体験をさせていただくことができました。連載中、何人かの方々からご感想ご意見をお寄せいただきました。ある方から「Oさんのこえてきたかなしみだが、どこかの誰かに勇気を与えています」というお便りをいただいた時は、目頭があつくなりました。

書くことは、人との出会いや別れによって触発されたというOさん。そして、書くことで、心の中の大きな重荷を軽くすることができたこと。様々な出会いの中でたまたま編集長と知り合い、夕焼け通信に投稿することで、読んだ人の心を動かした。Oさんは、体験にことばをあたえたと書かれたが、ことばには書いた人の思いが乗っているのだと改めて思う。書くということは文字に思いを込めることで、読むということは文字から思いをくみ取るということだ。そういう意味では、夕焼け通信が様々な書き手の思いを乗せて発信し、あちらこちらに居る読み手がその思いを受け止めてくれてるのだと思う。

さて、私はというと、春休みのちよつとした息抜きに家族旅行した記録を、「天草旧婚旅行」というタイトルで連載した。新婚旅行でたどり着けなかった天草へ家族で向かったのだ。天草への旅も、手にした本から思春期の頃に出会った人の話を思い起こし、そこから想像が膨らみ、どうしても行ってみたいという思いにかき立てられたものだ。今回は六人に増えた家族が一緒、事前に宿泊所を確保しての旅だ。

30代フリーター 動画配信サービスのネットフリックスの映画やドラマのトップ10はたいていうち3〜4本はアニメだ。日本では興行収入でアニメ映画が実写映画を凌駕し、海外でもアニメ人気は高い。

年金生活者 いま人びとが求めている物語は実写よりアニメのほうが適しているからではないか。

物語はどんなに複雑な話でも、主人公が困難を乗り越えて何かを達成しようという力を尽くすというのが共通のパターンだ。欠けたものを満たしていくこと、欠如を充足に変えていくこと、その過程を骨格として物語は成立する。

その原型は人間の生誕とその後の生涯にある。人間は一体だった母から離れ、存在の半分を欠いてこの世界に生まれてくる。その欠如を埋めることが生涯にわたる願望となる。現実には満たされることのないその願望を現実に代わって満たすのが物語だ。

30代 それならアニメでなくても。

年金 ところが、今の時代は現実そのものがその願望をある程度まで満たすようになった。資本主義の高度化が富の稀少性の縮減を加速し、貧困という欠如を埋めていったからだ。貧困を脱した現実が、生誕にもなう根源的な欠如を埋めるのを代替するようになったと言ってもいい。

そんな現実を映し出さざるを得ない実写作品は、欠如を埋める物語を作るのが難しくなってきた。現実が欠如の充足を代替し、物語のような役割をするようになったのなら、無理して物語を作らなくてもいいではないかということになる。だが、代替はあくまでも代替でしかなく、むしろ不全感を残して願望を強める。物語はいつそう求められる。

しかし、欠如の充足を代替するようになった現実を反映した物語では、人びとの願望を満たすことはできない。現実には逆らう物語が必要になる。それを作りやすいのは実写よりアニメだ。そこでは主人公は現実離れた理想に

向かって、現実離れた手段と行動力で進んでいくことができる。

30代 物語と言えば、折口信夫は世界各地に共通する物語の類型があると指摘し、それを「貴種流離譚」と名づけた。高貴な身分に生まれた主人公が他郷に追いやられ、流浪したのちに、再び栄光を取り戻すという物語のパターンを指す。

年金 そうした物語は人間の生誕と死を両端として組み立てられている。吉本隆明はどこかで、物語には共通する基本パターンがあつて、それはキューブラー・ロスの唱えた死の受容の5段階と同じ過程をたどるという趣旨のことを語っていた。どの著作か思い出せないで、記憶違いかもしれないが、この考えを貴種流離譚のひとつ『竹取物語』に当てはめると納得がいく。

ロスは『死ぬ瞬間』で、死期の迫った患者はおおむね次の5つの段階を通ると指摘している。

第1段階・否認（自分が死ぬなんて嘘だろうと疑う）

第2段階・怒り（なぜ自分が死ななければならないのかと怒る）

第3段階・取引（死なずにすむように取引を試みる）

第4段階・抑うつ（なにもできなくなる）

第5段階・受容（自分が死んで行くのを受け入れる）

これらの各段階を人間の生誕から死に至る過程に対応させると、次のようになる。

第1段階・否認（母胎の楽園を追われ、この世界の荒れ野に放り出された新生児は、その激変が信じられない）

第2段階・怒り（早く楽園に戻してくれと怒り、それに応じない母を憎む）

第3段階・取引（母の全面的な庇護を受けて喜び、不満を残しながらも妥協して、母を愛するようになる）

第4段階・抑うつ（母への愛が高揚期を過ぎ、反動で気持ちが落ち込む）

第5段階・受容（母胎の楽園に帰るのはあきらめ、その願望は代替行為で満たそうとするようになる）

ニュース日記 962
中村 礼治

物語についての物語

『竹取物語』はこの各段階を省略や変形を含みながら進んで行く。かぐや姫はもとは月の世界の住人で、そこで罪を犯し、人間の世界に追放される。竹の中にいるのを竹取の翁に発見されて家に連れて帰られ、翁と妻の嫗に育てられる。翁はこの子に出会って以来、黄金の入った竹をたびたび見つけ、裕福になっていく。

は、翁に発見されたときすでにその段階を過ぎていたからだ。自分を追放した母に代わって庇護者となった翁と嫗への恩返しとして彼らに黄金を与える。愛という形をとった取引だ。彼女は5人の貴公子から求婚されたとき、無理難題を吹っかけ、それにこたえてくれた相手と結婚すると約束する。こんな遠回しなことわり方したのも、育ての両親が5人に顔向けできないようなことにならないように配慮したからと解釈することができる。

第4段階の抑うつは、満月の下でかぐや姫が悲しい表情をしながら、自分は月に帰らなければならぬと翁に伝える場面に象徴される。そして最後の第5段階は、彼女の昇天によって表現される。ただし、反転した形で。人間なら母胎の楽園への帰還はあきらめ、その代替行為で我慢するが、彼女は人間ではないので、ほんとうに楽園に帰って行く。

30代 ジイさんの解釈そのものが虚構の物語のように聞こえてきた。